

生誕250年 古典派とロマン派 “ベートーヴェン” 第4回
を繋いだ楽聖

プログラム

今年生誕250年に当たるドイツの大作作曲家ベートーヴェン特集するシリーズも今回の第4回目で最終回です。

5曲あるベートーヴェンのピアノ協奏曲は先に第2番が作曲され、その後第1番が作曲されましたが、第1番の方が先に出版されたため、出版順の番号となっています。第2番は1786年から1795年間に作曲、第1番は1795年3月に完成しウィーンのブルグ劇場でベートーヴェン自身のピアノとサリエリの指揮で初演されました。その後2度の改訂を経て、1801年に最終稿が3月に出版され、第2番は1801年12月に出版されています。ピアノ協奏曲第1番ハ長調は24歳の頃の作品で、まだ第3番以降みられる完成度では劣りますが、その分若々しく、はち切れんばかりの躍動感と優雅な美しさは第1番でしか味わえない魅力があり、この時代を代表する名曲のひとつです。ベートーヴェンは1798年から1802年にヴァイオリンと管弦楽のための「ロマンス」という2曲の小品を作曲しました。ロマンスとはもともとスペインのロマンスから起源していますが、一定の様式や形式を指すものではなく、抒情的な歌を意味するようになり、18世紀以降、抒情的な器楽の小品に対して使われるようになりました。ベートーヴェンのロマンスはどちらもロマンティックで詩情豊かな美しさを持っていますが、ロマンス第2番ハ長調はより一層歌謡性が強く、ベートーヴェンの最も愛らしい名曲と言っても良いでしょう。1811年ベートーヴェンは41歳の時に、ピアノ三重奏曲第7番変ロ長調を作曲しました。「大公」という名称で親しまれていますが、これはオーストリアのルードルフ大公に捧げられたため、大公はベートーヴェンより18歳年下でしたが、16歳の時からベートーヴェンに師事、身分や年齢の差を超えた不思議な友情が続きました。曲は雄大な4楽章構成で、協調し合う3つの楽器が見事に融合され、堂々たる品格と雄弁さを持った古今のピアノ・トリオを代表するの傑作です。耳の病のため32歳の頃からハイリゲンシュタットに居を移したベートーヴェンは大自然の中でインスピレーションを得て次々と傑作を生んで行きますが、1818年からはさらなる静養地を求め、ウィーン近郊のメードリングへ行って「荘厳ミサ曲」を作曲、1823年にはバーデンへ行き交響曲第9番ニ短調の完成に力を注ぎました。この曲はドイツの詩人シラーの「歓喜に寄す」を読んで感銘を受けたベートーヴェンが、ボン時代にこの詩に曲をつける構想を考え始めた頃からスタートしています。1815年に第2楽章のスケッチが残されていますが、第4楽章に合唱を入れる事など本格的に着手したのは1822年でした。1824年2月に完成、5月7日にベートーヴェンの指揮で初演されましたが、この時ベートーヴェンは完全に耳が聞こえなかったため、楽団の指揮者の助けが必要でした。演奏後の聴衆の熱狂が分からなかったベートーヴェンはアルト歌手の手助けで初めて喝采の嵐を知り、丁寧に挨拶をした、という逸話が残っています。交響曲と合唱を結び付けた最初の偉大な作品で、その後の交響曲の歴史に大きな影響を与えました。ベートーヴェンは病状が絶望的となった1827年3月、甥に相続の遺書を残し、56歳で波瀾の生涯を閉じました。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ピアノ三重奏曲第7番変ロ長調 op.97 “大公” ~ 第1楽章、第2楽章、第3楽章から、第4楽章

第1楽章 アレグロ・モデラート 第2楽章 スケルツォ、アレグロ

第3楽章 アンダンテ・カンタービレ・マ・ペロ・コン・モート 第4楽章 アレグロ・モデラート

スーク・トリオ (ヨゼフ・スーク(ヴァイオリン)/ヨゼフ・フツフロ(チェロ)/ヤン・パネンカ(ピアノ))

(1976.6.26 東京文化会館大ホールでのLive)

ピアノ協奏曲第1番ハ長調 op.15 ~ 第1楽章、第2楽章から、第3楽章

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 第2楽章 ラルゴ 第3楽章 ロンド、アレグロ

内田光子(ピアノ)/サイモン・ラトル指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(2010.2.4 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ロマンス第2番ハ長調 (ヴァイオリンと管弦楽のための) op.50

ルノー・カブソン(ヴァイオリン)/クルト・マズア指揮ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団

(2009.10.9 ライブツィヒ、聖ニコライ教会でのLive)

交響曲第9番ニ短調 op.125 “合唱付き” ~ 第1楽章、第4楽章から

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo・ウン・ポコ・マエストーソ 第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ-アンダンテ・モデラート 第4楽章 プレスト

ヘレン・ドナート(ソプラノ)/ブリギッテ・ファスベンダー(アルト)

ホルスト・ラウベンタール(テノール)/ハンス・ゾーティン(バス)

ラファエル・クーベリック指揮バイエルン放送交響楽団/バイエルン放送合唱団

(1982.5.14 ミュンヘン、ヘルクレスサールでのLive オルフェオ盤CD)